

平成 27 年度決算にかかる
財政健全化判断比率の概要

紋別市 総務部 財政課 財政係
T E L 0158-24-2111 (461・248)
E-mail zaisei@city.mombetsu.lg.jp

1 財政健全化法

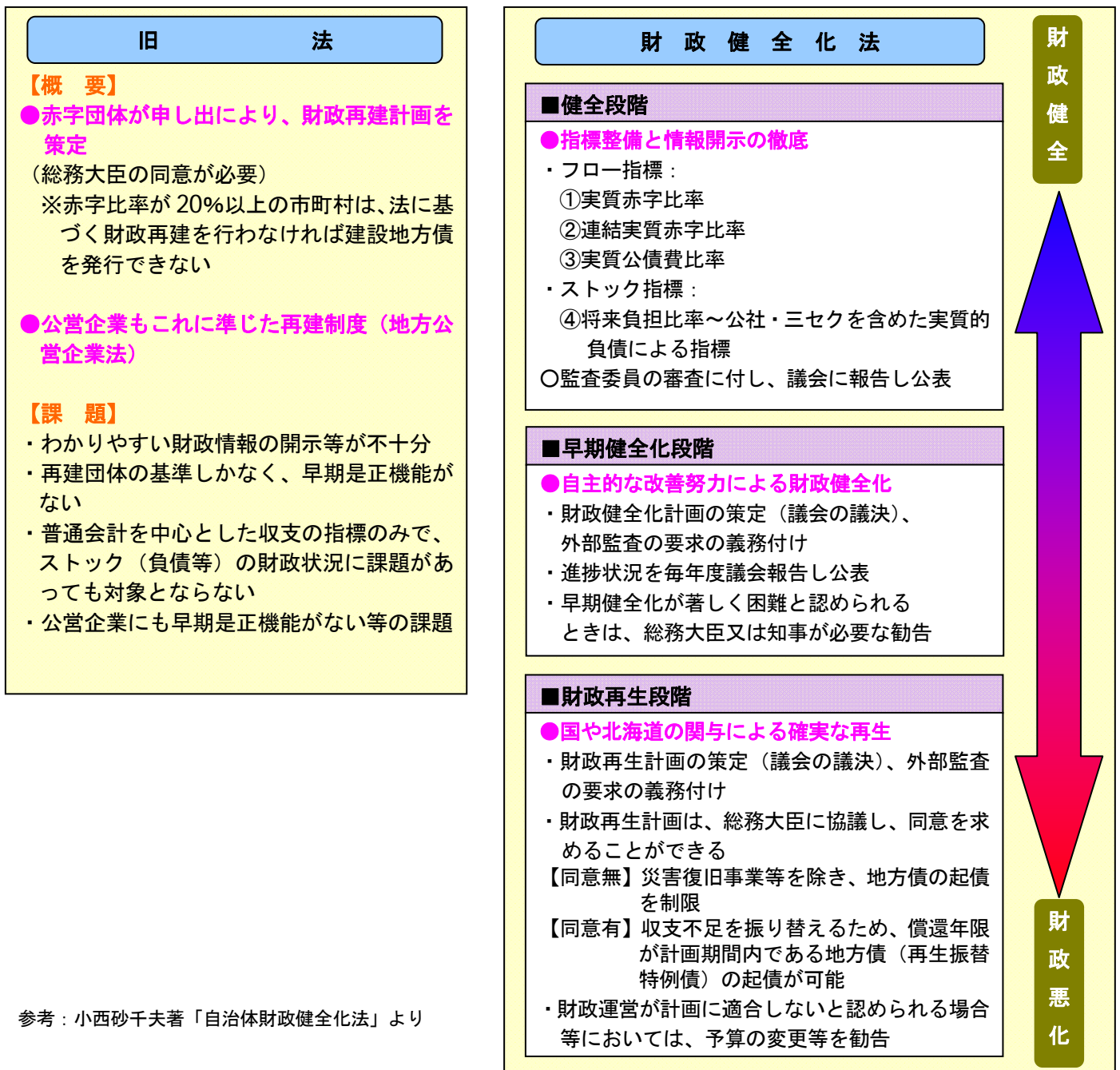
地方財政の破たん処理に対応する法律は、昭和 30 年に制定された「地方財政再建促進特別措置法」（以下、旧法とします。）に基づき行われてきましたが、平成 18 年 6 月に夕張市が財政再建団体に指定されたことを受け、地方財政に対応する新たな仕組みが求められるようになりました。

そのため、財政破たんへの対応だけでなく、財政状況が悪化しつつある地方自治体を早期に健全化し、破たんさせないことを重要な目的として、平成 19 年 6 月に「地方公共団体の財政の健全化に関する法律」（以下、健全化法とします。）が成立し、「健全化判断比率」と「資金不足比率」について、監査委員の審査を付し議会上に報告し、公表することが義務付けられました。

この健全化法では、普通会計のほか、特別会計や第三セクターにも着目し、住民が将来的に負担する可能性のある負債を含めた指標などが新たに設けられています。

旧法と健全化法の違いは下記図表 1 のとおりです。

★図表 1 旧法と健全化法の比較



参考：小西砂千夫著「自治体財政健全化法」より

2 健全化判断比率・資金不足比率

平成27年度決算にかかる紋別市の健全化判断比率は、**図表2**のとおりで、いずれの指標も早期健全化基準を下回ったところです。資金不足比率についても、比率が発生した会計はありませんでした。

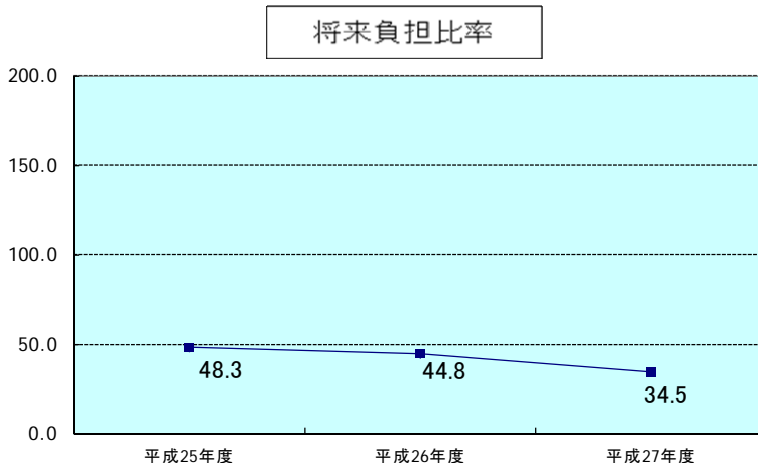
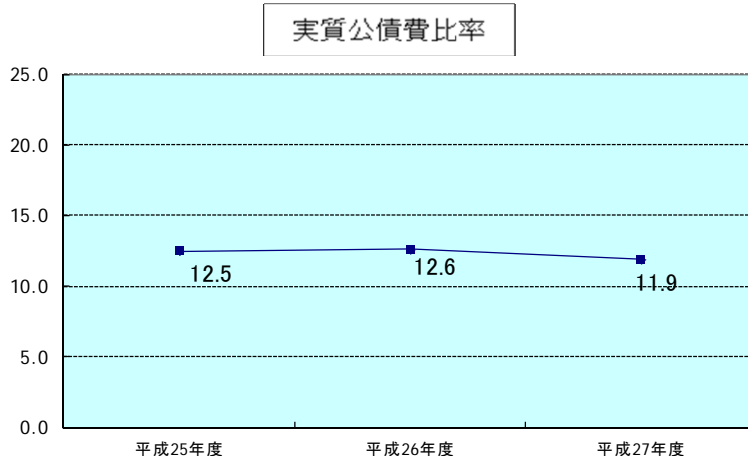
図表3～図表7は、各比率の算定式です。詳細は、それぞれの項目で説明します。

★図表2 紋別市の健全化判断比率と資金不足比率

	紋別市	早期健全化基準	財政再生基準
実質赤字比率	—	13.34%	20.00%
連結実質赤字比率	—	18.34%	30.00%
実質公債費比率	11.9%	25.0%	35.0%
将来負担比率	34.5%	350.0%	

区分	会計の名称	資金不足比率
地方公営企業法 適用企業	水道事業会計	—
	下水道事業会計	—
地方公営企業法 非適用企業	簡易水道事業特別会計	—
	港湾埋立事業特別会計	—

参考) 実質公債費比率と将来負担比率の動き



★図表3

$$\text{実質赤字比率} = \frac{\text{一般会計等の実質赤字}}{\text{標準財政規模}}$$

[趣旨] 一般会計等を対象とした実質赤字の標準財政規模に対する比率

★図表4

$$\text{連結実質赤字比率} = \frac{\text{連結実質赤字額}}{\text{標準財政規模}}$$

[趣旨] 全会計を対象とした実質赤字(または資金不足額)の標準財政規模に対する比率

★図表5

$$\text{実質公債費比率} = \frac{(\text{元利償還金} + \text{準元利償還金}) - (\text{特定財源} + \text{元利償還金} \cdot \text{準元利償還金} \text{にかかる普通交付税} [\text{基準財政需要額}] \text{算入額})}{\text{標準財政規模} - (\text{元利償還金} \cdot \text{準元利償還金} \text{にかかる普通交付税} [\text{基準財政需要額}] \text{算入額})}$$

[趣旨] 一般会計等が負担する元利償還金および準元利償還金の標準財政規模に対する比率(3か年平均)

★図表6

$$\text{将来負担比率} = \frac{\text{将来負担額} - (\text{充当可能基金} + \text{特定財源見込額} + \text{地方債現在高等にかかる普通交付税} [\text{基準財政需要額}] \text{算入額})}{\text{標準財政規模} - (\text{元利償還金} \cdot \text{準元利償還金} \text{にかかる普通交付税} [\text{基準財政需要額}] \text{算入額})}$$

[趣旨] 一般会計等が将来負担すべき実質的な負債の標準財政規模に対する比率

★図表7

$$\text{資金不足比率} = \frac{\text{流動負債} + \text{建設改良費以外の経費} \text{にかかる地方債の現在高} - \text{流動資産} - \text{解消可能赤字額}}{\text{事業の規模} - (\text{営業収益の額} - \text{受託工事収益の額})}$$

[趣旨] 公営企業ごとの資金の不足額の事業の規模に対する比率

3 実質赤字比率

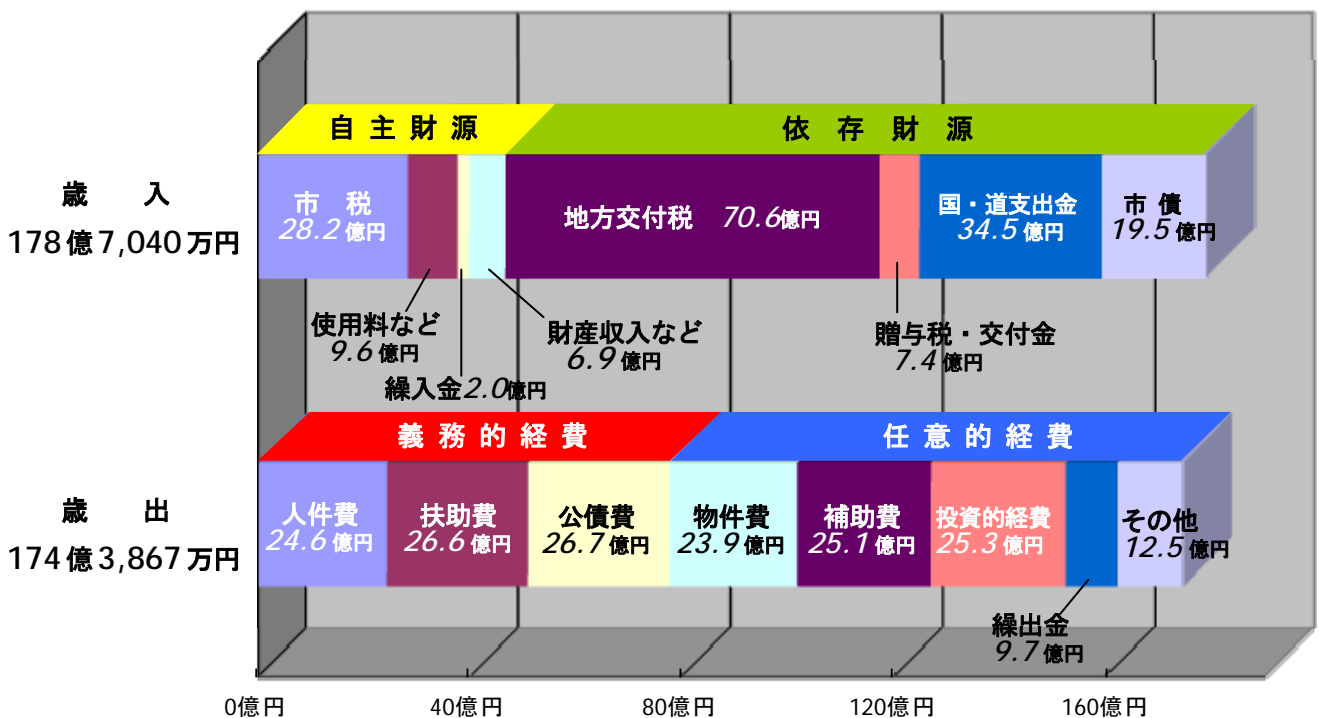
◆実質赤字比率

地方自治体の会計は、公営企業法を適用している会計（民間企業とほぼ同様な発生主義会計）以外は、現金主義会計となっています。発生主義会計の赤字と現金主義会計の赤字とは意味がまったく異なります。発生主義会計の赤字は、当期の収益でコストが回収できず利益が出なかった場合を指します。現金主義会計の赤字は、当期に入ってきた現金で当期に出ていく現金を調達できなかったことを指し、借入金も収入であり、貯金の積立も支出となります。両者の最も相違するところは、建設事業費の扱いです。現金主義会計では建設事業費が支出として出ていく現金なので、全額を歳出として認識しますが、発生主義会計で当期の経費として認識するのは事業費そのものではなく、それにかかる減価償却費のみです。

実質赤字比率は、一般会計等の歳入総額から歳出総額を差し引き、さらに支払いが翌年度となった経費を差し引いたものを標準財政規模で除したものとなります。

紋別市の平成27年度決算は、**図表8**のとおり、歳入歳出差引額は、4億3,172万9千円となり、ここから平成28年度に繰り越すべき財源730万4千円を控除したものが実質収支となり、4億2,442万5千円の黒字決算となったことから、実質赤字比率は発生していません。

★図表8 一般会計等の歳入・歳出の状況



歳入については、国などからの交付金や補助金、借金である市債などの依存財源が約74%を占めており、市が自主的に収入できる自主財源は26%足らずとなっています。

特に地方交付税が収入全体の約39%と最大の収入科目であり、国の政策に大きく影響される財政構造といえます。

歳出では、人件費や扶助費、公債費といった義務的経費が45%を占めており、硬直性が高い財政構造となっています。

4 連結実質赤字比率

◆連結実質赤字比率

一般会計等のみではなく、特別会計や発生主義会計を採る企業会計を含む全会計の資金不足額の純計の相対的な規模として定義される比率です。

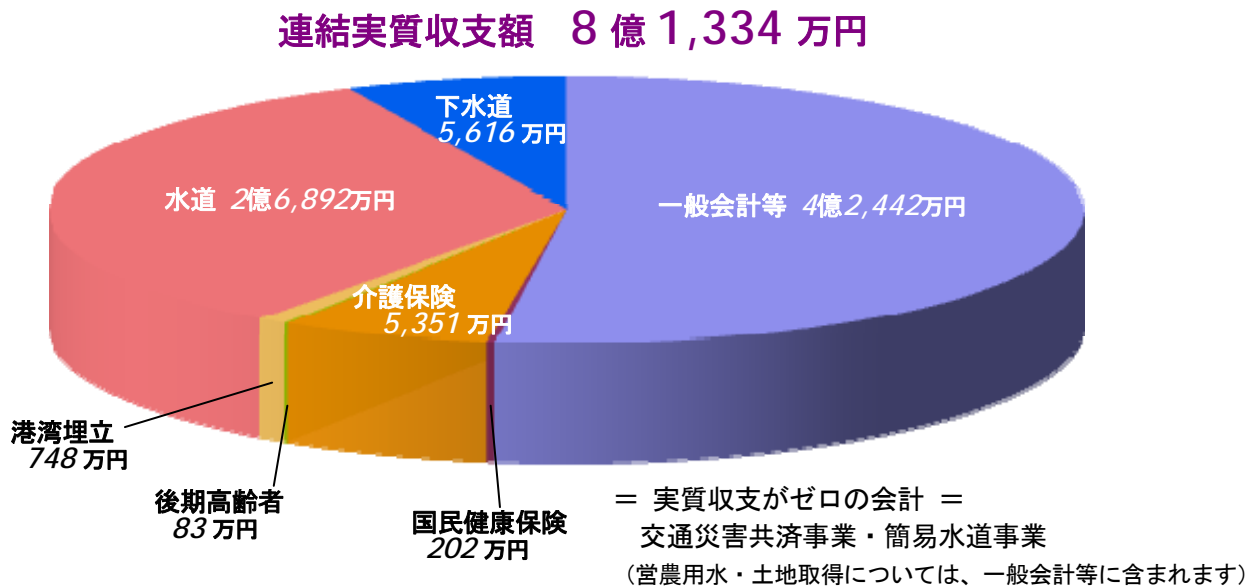
紋別市の場合、水道事業と下水道事業については、発生主義を採っていることから、貸借対照表の流動資産から流動負債を差し引いた額を資金不足（剰余）額と算定*します。図表10のとおり水道事業の資金剰余額は2億6,892万2千円、下水道事業会計では5,615万7千円となりました。

一般会計等と公営企業以外の特別会計については、実質収支の額で算定しており、実質収支がゼロまたは黒字の場合はその額で算定し、赤字の場合は法に基づき、やむを得ない赤字額や解消可能赤字額を、赤字額を限度に控除して算定します。各会計の決算額等は、図表9のとおりです。

平成24年度決算まで赤字であった港湾埋立事業特別会計については、第3ふ頭用地の一部が売却されたことにより、前年度に引き続き黒字決算となりました。なお、港湾埋立事業特別会計が保有する販売用土地の内訳については、図表11のとおりとなっています。

これらを合計すると、8億1,334万4千円の黒字となり、連結実質赤字比率は算定されませんでした。

★図表9 連結赤字（黒字）額の内訳



★図表10 企業会計（法適用）の内訳

会計名	流動資産	流動負債	差引（資金剰余）
水道事業	598,774千円	329,852千円	268,922千円
下水道事業	399,889千円	343,732千円	56,157千円

* 会計基準の見直しにより、流動負債のうち翌年度償還企業債については、算定から除外されています。また、流動負債のうち賞与引当金、流動資産のうち貸倒引当金については、3年間の算入猶予期間が設けられているため、同様に算定から除外されています。

★図表11 港湾埋立事業会計の内訳

	販売用土地 面積 (m ²)	評価額 a (千円)	帳簿価格 b (千円)	収入見込額 aとbの低い額
第2ふ頭地区	14,262	69,552	139,126	69,552
第3ふ頭地区	39,781	203,431	194,290	194,290
合計	54,043	272,983	333,416	263,842

※評価額 a は、相続税路線価から販売経費見込額を差し引いた額

※帳簿価格 b は、造成経費に利子・人件費・下水道受益者負担金等を加えた造成原価

5 実質公債費比率

◆実質公債費比率・・・11.9%

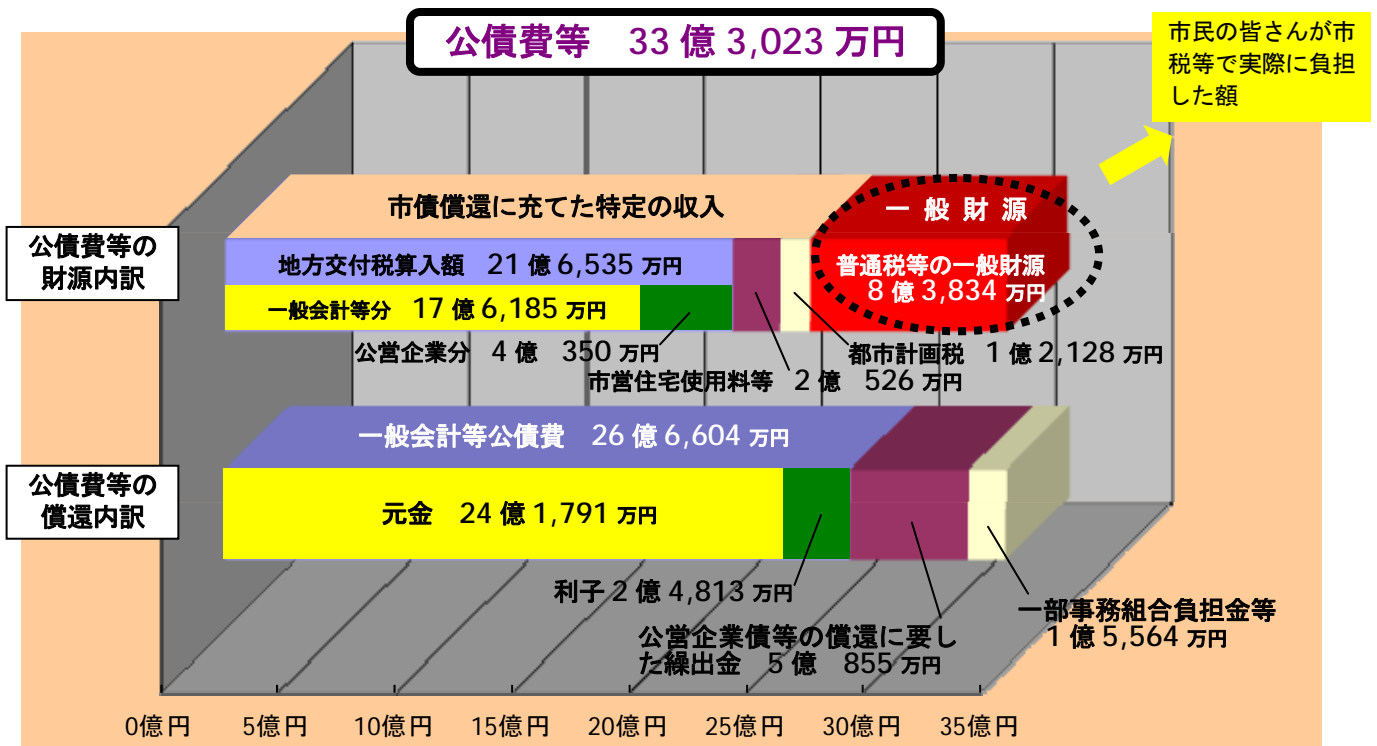
用途が比較的自由な一般財源（標準財政規模）の中で、市債の償還金である公債費や市債に準ずる債務の償還金がどの程度占めているのかを表す指標です。

図表12は、平成27年度の一般会計等が負担した市債元利償還の内訳です。グラフ下段は、公債費の償還内訳で、一般会計等のほか、公営企業債等の償還に充てられたと認められる繰入金（内訳は図表14）、備品等耐久消費財購入など市債に準じる債務負担行為にかかる支出額を示しています。グラフ上段は、公債費に対する収入の内訳です。元利償還金が地方交付税により措置されている額、公営住宅事業債の償還に充てた市営住宅家賃収入、都市計画事業債の償還に充てた都市計画税などです。

これらの収入を控除し、実際に税等で市民の皆さんが負担した額が、上段右端の赤色部分で、公債費等総額の25%程度となっています。実質公債費比率は、この赤色部分を分子として、分母を、標準財政規模から公債費償還にかかる地方交付税算入額を控除した額（図表13の99億7,062万円－グラフ上段（青色）の21億6,535万円）78億527万円として算出し、それらを3か年平均したものです。

平成27年度は、元利償還金が減少したことなどにより、平成26年度比で1.36ポイント改善し、3か年平均でも0.7ポイント改善しました。

★図表12 公債費の内訳（平成27年度）



★図表13

標準財政規模及び実質公債費比率

(単位：千円、%)

	標準財政規模	実質公債費比率 (単年)
H25	9,879,515	12.87670
H26	9,718,711	12.10205
H27	9,970,624	10.74064
3か年平均		11.9

★図表14

公営企業の繰入金の内訳

(単位：千円)

水道事業会計	5,422
下水道事業会計	490,542
簡易水道事業特別会計	12,583
合計	508,547

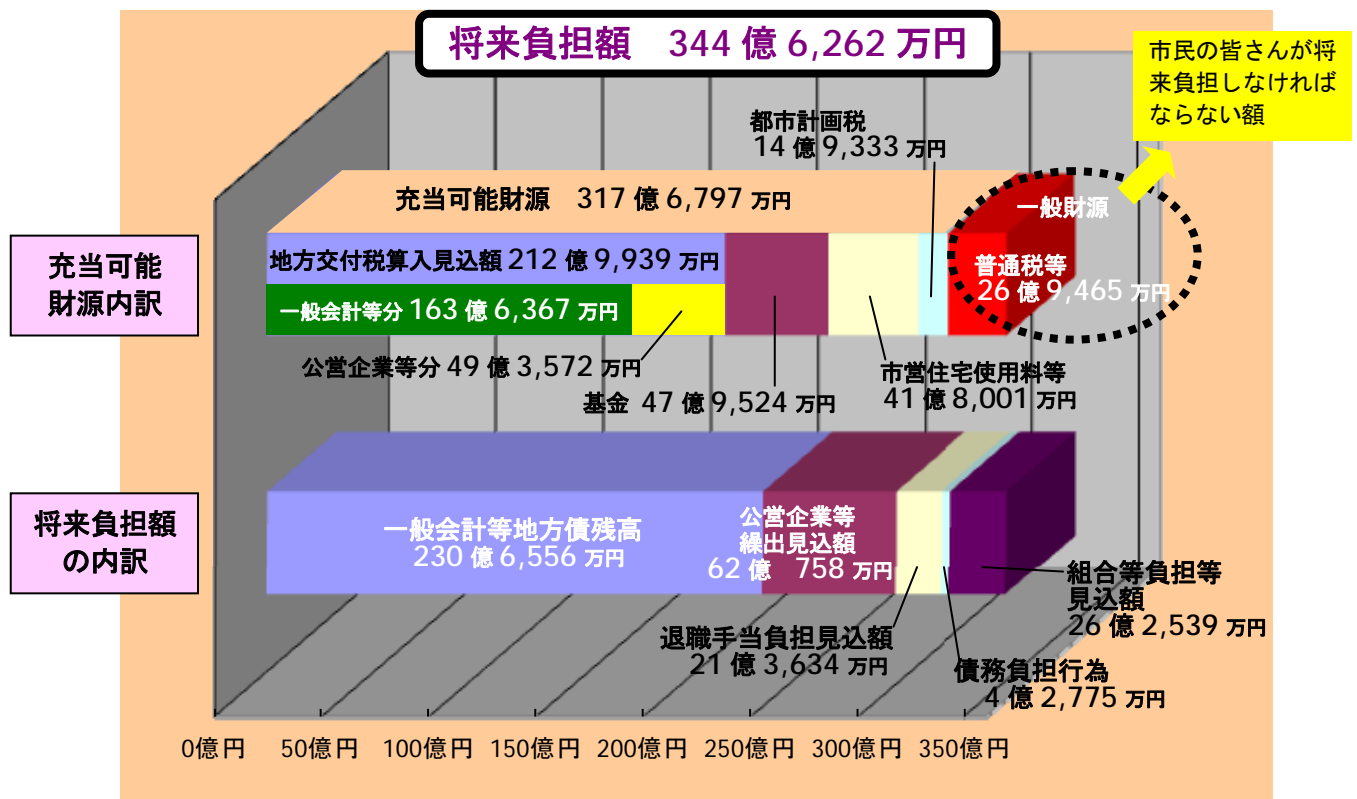
6 将来負担比率

◆将来負担比率・・・34.5%

この指標は一般会計等が負担すべき、平成27年度末までに確定している負債がどの程度あるのかを表す指標です。図表15は、将来負担額の内訳です。将来負担額全体に対する充当可能財源（グラフ上段、橙色部分）の不足額が、市民の皆さんが将来負担しなければならない負担額（グラフ上段、赤色部分）です。この不足額を標準財政規模から当該年度地方交付税算入額を控除した額（図表12、13参照：99億7,062万円－21億6,535万円）78億527万円を除した結果、将来負担比率は、34.5%となりました。

将来負担額は、一般会計等が負担しなければならない債務（元金のみ）という概念ですが、実際に市はどれだけの借金を抱えているか、またこれら債務の償還に要する利子はどの程度になるかを表したものが、図表16です。特別会計や企業会計では、一般会計等からの繰入金以外は、それぞれの料金収入で償還していくこととなります。利子は、市債の多くが5～10年の利率見直しを行うため、額が確定していないことから、将来負担比率の算定には含まれませんが、現行利率で推移すると仮定した場合の支払い見込み額を記載しています。もちろん利子についても交付税算入があることから、全てが市民の皆さんの負担となるわけではありません。

★図表15 将来負担額の内訳（平成27年度）



※一般会計等以外の会計についても、物品等購入の債務負担残高や、退職手当負担見込額などを有しています。

★図表16 市債残高及び利子の純計

会計名	年度末元金残高	小計	会計名	年度末元金残高	小計
	発生見込利子			発生見込利子	
一般会計等	230億6,556万円	241億6,209万円	下水道事業	87億1,548万円	97億6,963万円
	10億9,653万円			10億5,415万円	
簡易水道事業	3億525万円	3億4,795万円	上水道事業	50億5,157万円	57億1,684万円
	4,270万円			6億6,527万円	
港湾埋立事業	5億7,934万円	6億2,429万円	合計	377億1,720万円	406億2,080万円
	4,495万円			29億360万円	

7 全道他市との比較

紋別市の健全化判断比率を全道都市（35市）と比較したものです。図表17は、再生団体や早期健全化団体となった団体数の内訳です。なお、数値及び団体数等は速報値ですので、今後変更される可能性があります。

（平成28年10月6日現在）

実質赤字比率

一般会計等が赤字決算となった団体は、道内都市ではありませんでした。

紋別市は、約13億円の赤字で早期健全化基準に達する見込みです。財政調整基金への積み増しを実施しておりますので（H28末残高見込額は15億839万円）、当面赤字が発生する心配はありませんが、ごみ処理施設や病院建設等といった大型事業の地方債にかかる償還が開始されることから、基金残高を一定程度確保する必要があります。

連結実質赤字比率

連結実質赤字比率が算定された団体は、道内都市ではありませんでした。

紋別市は、約18億円の赤字で早期健全化基準に達する見込みであり、連結赤字の発生を防止するため、国民健康保険や下水道といった財政基盤が脆弱な会計では、税（使用料）の徴収率向上に努めます。なお、実質収支赤字が続いていた港湾埋立事業特別会計は、大規模土地の売却により、H25年度決算から黒字へ転換しています。

実質公債費比率

■ 紋別市 11.9%、全道都市平均 12.2%

実質公債費比率では、地方債の発行の際に知事の許可が必要となる18%に達している団体は、2団体となっています。紋別市は35市中26番目であり、全道都市の中位に位置している団体となっています。最も比率の低い団体は、北広島市で4.4%です。

紋別市では、ごみ処理施設など多額の市債発行を伴う事業が実施されていることから、比率を18%未満に保つよう市債発行の抑制を続けていく必要があります。

将来負担比率

■ 紋別市 34.5%、全道都市平均 91.5%

将来負担比率では、紋別市は34.5%となり35市中7番目の数値でした。比較的市債残高が多額にもかかわらず、この比率が低位であるのは、近年市債の多くを過疎対策事業債という有利な条件（その元利償還金の70%が交付税に算入される⇒実質的な市の負担は30%）のものを優先的に借り入れていることなどが要因です。

全道都市で高い比率の団体は、夕張市（632.4%）、美唄市（170.9%）、網走市（158.1%）などです。比率の最も低い団体は、北斗市、歌志内市で比率が発生していません。

紋別市は、累積赤字を抱える特別会計や三セク等がないため、今後においても比較的低位で推移するものと思われます。

★図表17 全道都市の状況

		財政再生基準を超えた団体数	早期健全化基準を超えた団体数	備考
健全化判断比率	実質赤字比率	0 団体	0 団体	
	連結実質赤字比率	0 団体	0 団体	
	実質公債費比率	1 団体	0 団体	夕張市
	将来負担比率		1 団体	夕張市
資金不足比率			1 団体	釧路市(その他事業)

8 財政用語

この説明資料で使われている財政用語の主なものについて、簡単に説明いたします。

標準財政規模

地方自治体の一般財源の大きさを示す指標で、健全化法の4比率の分母に使われる重要な指標です。具体的には、標準税収入＋普通交付税＋地方譲与税＋臨時財政対策債で算出されます。

4比率以外の指標で使われる場合は、上記算定式の臨時財政対策債を含めない場合もあります。

会計

市の会計は、不特定多数の市民に関連する一般会計と、特定の市民の利益のために設置する特別会計や企業会計を設置しています。特別会計を具体的に説明すると、国民健康保険事業は、国民健康保険に加入している人たちの保険税でまかなわれ、下水道事業では、下水道が布設されている地域の人たちの使用料でまかなわれているという、受益と負担の関係で特別会計は成り立っています。

一般会計等

地方自治体の会計は一般会計のほかに、法律で必置となっている特別会計や、条例で設置できる特別会計があり、会計の数はバラバラです。健全化法では、他自治体との比較を容易とするために、公営企業会計とその他の特別会計に区分し、これらに該当しないものを一般会計等としています。

紋別市においては、一般会計のほか営農飲雑用水道事業と土地取得事業が、一般会計等に含まれます。

一般財源

自治体の裁量で用途が決められる性質の収入を一般財源といいます。予算費目では、普通税・地方交付税・地方譲与税などです。これに対して、国庫補助金のように用途が定められているものを特定財源といいます。

地方債（市債）

市が道路や学校などを造る建設事業の際に資金調達のために、政府や銀行から借り入れる長期の借金のことと、皆さんの家計にたとえると、住宅ローンのようなものです。市債は、事業資金調達のほかに、世代間の負担を公平に調整する機能があります。道路や学校は長期間にわたり利用されますので、後世代の市民にも負担を求めるという考え方です。住宅ローンとの大きな違いは、元利償還金の一部が、地方交付税により国から補てんされるものもあるということです。

繰出金（繰入金）

会計間の資金のやりとりを行う予算科目で、支払い側の支出科目が繰出金で、受け取り側の収入科目が繰入金となります。健全化判断比率で使われる場合は、一般会計から特別会計等への支出の意味です。一般会計から特別会計等への繰り出しは、受益と負担の原則に反するように思えますが、特別会計に対して措置される地方交付税が、一括して一般会計で収入されることなどから、繰出金が発生するものです。

一時借入金

一般会計及び特別会計の予算については、歳入・歳出均衡の原則があります。しかし、資金需要期と収入時期は必ずしも一致するわけではないことから、年末の資金需要期など一時的に支払い資金が不足する場合があります。その際に金融機関から、一時的に資金を借り入れることを一時借入金といいます。

一時借入金は、年度内に償還しなければなりません。

債務負担行為

一般会計及び特別会計の予算については、その年度の支出はその年度の収入をもってまかなうという、単年度主義の原則があります。しかし、複数年にわたる契約などが必要な場合もあり、単年度主義の例外として、債務負担行為の設定（議会の議決が必要）が認められています。

実質公債費比率で使用される、公債費に準ずる債務負担行為とは、自動車やコンピューターなどの耐久財を購入し、複数年で支払う場合が該当します。将来負担比率ではこのほか、年限を設定して行う民間に対する補助金なども債務負担行為に該当します。

地方交付税

地方税の税源が均等ではなく、著しい地域差がある状況を前提に、全国どこの市町村でもほぼ同一水準の一般財源を保障しようとするため、国税の一定割合*（所得税の33.1%、酒税の50%、法人税の33.1%、消費税の22.3%、地方法人税の全額）を地方に交付するものです。

地方交付税は、普通交付税（交付税総額の94%）と、災害などの特殊な財政需要に対応する特別交付税（同6%）があります。

普通交付税の配分方法は「基準財政需要額－基準財政収入額」で算出します。

基準財政需要額

ごみ収集や義務教育など市が法令で定められた事業を実施するため、皆さんに住民税を負担していただいています。しかし、多くの自治体では、経費に見合う税収を確保できていないのが現状です。この財源不均衡を調整するのが地方交付税です。人口や面積を基準として、その自治体の規模において法令で定められた仕事をするための経費を算定します。これが基準財政需要額になります。

実質公債費比率や将来負担比率で使用されている、「災害復旧費に係る基準財政需要額」「事業費補正により基準財政需要額に算入された公債費」「密度補正により基準財政需要額に算入された元利償還金」とは、いずれも市債の元利償還金のうち、地方交付税で措置される額のことです。交付税の算入科目や計算方法が違うために区別しているものです。準元利償還金とは、特別会計等が発行した市債に該当するものです。

基準財政収入額

各自治体での普通地方交付税の算定に用いるもので、いわば標準的な状態で徴収しうる税収のことです。これが基準財政需要額を上回る自治体は、地方交付税が交付されない不交付団体となります。

総括表① 健全化判断比率の状況（平成27年度決算）

Ver.27.00

(単位:%)

地方公共団体 コード	都道府県名	市区町村名	実質赤字比率	連結実質赤字比率	実質公債費比率	将来負担比率
012190	北海道	紋別市	-	-	11.9	34.5

団体区分

3.市

↑※必ず選択して下さい。

(単位:%)

標準財政規模 (千円)	うち臨時財政対策債 発行可能額	早期健全化基準	13.34	18.34	25.0	350.0
	9,970,624	537,582	財政再生基準	20.00	30.00	35.0

総括表③ 実質公債費比率の状況(平成27年度決算)

Ver.27.00

団体名 北海道紋別市

(単位：千円)

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫
	元利償還金の額(繰上償還額等を除く)(3③A表「元利償還金」欄の数値を転記)	積立不足額を考慮して算定した額(3①表「エ」欄の数値を転記)	満期一括償還地方債の1年当たりの元金償還金に相当するもの(年度割相当額)(3①表「ウ」欄の数値を転記)	公営企業に要する経費の財源とする地方債の償還の財源に充てたと認められる繰入金(3②表「合計※」欄の数値を転記)	一部事務組合等の起こした地方債に充てたと認められる補助金又は負担金	公債費に準ずる債務負担行為に係るもの	一時借入金の利子	特定財源の額(3③A表「特定財源計」欄の数値を転記)	事業費補正により基準財政需要額に算入された公債費	事業費補正により基準財政需要額に算入された公債費(準元利償還金に係るものに限る。)	災害復旧費等に係る基準財政需要額	災害復旧費等に係る基準財政需要額(準元利償還金に係るものに限る。)
平成25年度	2,868,040			560,559	21,855	83,584		320,571	306,700	265,581	1,564,403	86,977
平成26年度	2,857,279			499,143	24,800	81,485	2,127	321,923	291,521	264,693	1,582,383	90,575
平成27年度	2,666,045			508,547	106,021	47,819	1,796	326,538	275,134	264,230	1,485,176	96,845

	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰
	密度補正により基準財政需要額に算入された元利償還金	密度補正により基準財政需要額に算入された準元利償還金(地方債の元利償還額を基礎として算入されたものに限る。)	標準税収入額等	普通交付税額	臨時財政対策債発行可能額
平成25年度	1,396	3,178	3,100,716	6,177,979	600,820
平成26年度	1,403	6,960	3,070,049	6,078,503	570,159
平成27年度	1,539	42,430	3,380,556	6,052,486	537,582

⑱
地方財政法第5条の3第4項第1号の規定に基づき総務大臣が定める額(特別区のみ記入)

	実質公債費比率(単年度)
平成25年度	12.87670
平成26年度	12.10205
平成27年度	10.74064

実質公債費比率(3カ年平均)
11.9

(参考)

	⑥の内訳									
	PFI事業に係る債務負担行為に係るもの(省令第7条第1号)	いわゆる五省協定等により、利便施設及び公共施設を買い取るために行った債務負担行為に係るもの(省令第7条第2号)	国営土地改良事業並びに独立行政法人森林総合研究所、独立行政法人水資源機構及び独立行政法人環境再生保全機構の行う事業に対する負担金(省令第7条第3号)	地方公務員等共済組合が建設した職員住宅等の無償譲渡を受けるために支払う賃借料(省令第7条第4号)	社会福祉法人が施設の建設のために借り入れた借入金の償還に対する補助(省令第7条第5号)	損失補償又は保証に係る債務の履行に要する経費の支出(省令第7条第6号)	地方公共団体以外の者の債務を引き受けた場合における当該債務の履行に要する経費の支出(省令第7条第7号)	その他これらに準ずると認められるもの(省令第7条第8号)	利子補給に係るもの(政令第12条第4号)	
平成25年度							78,489		5,095	
平成26年度							77,145		4,340	
平成27年度							44,426		3,393	

総括表④ 将来負担比率の状況（平成27年度決算）

Ver.27.00

団体名

北海道紋別市

将来負担額

(単位:千円)

地方債の現在高	債務負担行為に 基づく支出予定額	公営企業債等 繰入見込額	組合 負担等見込額	退職手当 負担見込額	設立法人の 負債額等 負担見込額	地方債の現在高			連結実質 赤字額	組合連結実質 赤字額負担見込額
						地方道路公社	土地開発公社	第三セクター等		
23,065,558	427,750	6,207,580	2,625,389	2,136,341	0	0	0	0	0	0

(分母比) 296 6 80 34 27

充当可能財源等

(単位:千円)

充当可能基金	充当可能 特定歳入	基準財政需要額 算入見込額	
		うち都市計画税	
4,795,242	5,673,334	1,493,327	21,299,394

(分母比) 61 73 19 273

将来負担額 A	充当可能財源等 B	A - B	将来負担比率 (%)
34,462,618 442	31,767,970 407	2,694,648 35	
=			
標準財政規模 C	算入公債費等の額 D	C - D	
9,970,624 128	2,165,354 28	7,805,270 100	
=			
			34.5